

# 儒学の性情論と居敬窮理論の現代的解釈

李 致億（倫理文化研究センター特任研究員）

## はじめに

儒学思想で「学び」はとても重要な意味を持つ。それは現代社会で一般的に使用されている「勉強」または「学習」の意味を遥かに超える。学びの目的は知識の増大、技術の習得にとどまらない。万一、儒教を宗教であるといえるならば、その儒教の宗教性を天、上帝、または先祖に対する崇拝と祭礼儀式から探すより、宗教の共通特性の1つである「超越性」から見出すことができるのではないか。ある神学者の主張によると、宗教は人間の持つ実存的限界を乗り越え、崇高たる存在へ跳躍する意味で「超越」を共通的な特性として持っているという。例えば、キリスト教は人間の実存的な限界を「原罪」と設定し、その限界を越え跳躍することを「救援」といい、そのための方法が「信仰」である。仏教は、人間はみな成仏の可能性を持っている存在であるが、「無明」のせいで解脱が実現できていないとみている。解脱の方法は「修道」を通じた「悟り」である。同じように、儒教では、人間は誰でも聖人になれることを基本前提とし、聖人になる道の妨げになるものが「欲心」である。この限界を越え、超越へと導く方法が「学び」にある。学びはキリスト教の信仰、仏教の悟りのような超越のための方法論である。

儒学における学びとは、具体的には「居敬」と「窮理」を指す。居敬と窮理はあまりにも基本的な概念であるため、数多い研究がなされ、専攻者はもちろん、大衆にもその概念や意味はよく知られている。しかし、居敬・窮理が過去の儒学者に限らず、現代にも有効なものであるにも拘わらず、形式的で堅苦しいアプローチのせいでほとんど死物扱いされているのはこの学界の痛い現実でもある。本稿はこのような現実反省から始まったものである。居敬と窮理に関する文献的な理解だけでなく、実質的に現代人の生活に有効な要素はどのようなものがあるか探ってみることにした。本稿では居敬・窮理を儒学の性情論と関連づけて理解してみようと思う。言うまでもなく、儒学は心の問題だけに触れている学問ではない。しかし、心に対する理解は儒学思想でもっとも大きな位置を占めているため、居敬・窮理も緊密な関係にあるといえる。居敬・窮理を、性情論を踏まえて探ってみることで一層その意味が鮮明になるだろう。